

ホーリネス説教の水脈を辿る—ウェスレーと東方の救済観（試論）

2014年3月25日 宮崎 誉

ホーリネス教団教育局では、2014年3月24日に有志牧師による聖会説教研究会が始められた。共有している二つのニーズがある。第一は、きよめ派の精神形成において重要な役割を担ってきた聖化で語られるホーリネス説教に力を取り戻したいという願いである。第二は、日本ホーリネス教団（JHC）の教育局（「聖化」ワーキング・グループ）によって編集された『私たちの信じる聖化』によって認識された聖化の諸理解を、どのように説教で具体化していくのかという実践神学的課題がある。

ジョン・ウェスレーの神学の特徴はプラクティカル・ディヴィニティと呼ばれ、信仰を実践的に表現するということだったと言われる。本レポートの意図も、教理や歴史神学で扱う事柄に触れつつも、むしろ説教という実践神学に向かうために題材を提供することである。このレポートでは、広範な歴史期間と学問領域を扱うこととなるので、それぞれの専門的な研究者からは、議論が穴だらけに見えるかもしれない。足りない面はご教授頂きたい。それを認めた上で、むしろ逆に新約聖書の時代から、今日のきよめ派の神学的課題に向けて穴を掘り進めるようにして、命の水脈を探そうとする取り組みであると受け止めて頂きたい。

目次

1. 序：JHC『私たちの信じる聖化』が提示する課題
2. ウェスレーにおける西方と東方の神学の影響
 - (a) ウェスレーと西方神学
 - (b) ウェスレーと東方神学の研究
 - (c) ウェスレーを取り巻く教父研究の環境
 - (d) 西方と東方の神学の特徴
3. ウェスレーが受け入れた東方神学の特徴
 - (a) 受肉の意味：神化（theosis） * 「聖化」
 - (b) 神の像（Imago Dei）の回復
 - (c) 参与（participation theory）
4. 根絶説の視点と、神の像の回復の視点との相違点と類似点
5. 結：今日のきよめ信仰（JHC『私たちの信じる聖化』）と聖化の水脈

1. 序：JHC『私たちの信じる聖化』が提示する課題

JHC教育局の「聖化」ワーキング・グループでは、聖化理解の未整理部分や問題提起されている事柄に関して、丁寧な議論を積み重ねていった。その結果として出されたのが JHC『私たちの信じる聖化』というパンフレットである。そこで、聖化理解の特に根絶説に関して修正がなされた。

このような倫理性に強調点が置かれて説かれ続けてきた「聖化」理解の背後には、罪の「根絶」という教理が中心にあり、戦前、戦後、さらには近年に至るまで聖化の理解の主流として受け継がれてきたように思われる。…教団全体としては前述したような問題を抱えて、今日に至ったのではないかと推測されるのである。

(中略) 時にはそれが律法的な方向に進む傾向にあったわれわれは、この聖化の祭儀的側面に、新たに目が開かれる思いで、そのメッセージに慰めを見いだしたのである。慰めのホーリネスが強調されるようになった背景には、罪の理解に対する進展があったことは否めない事実である。すなわち、根絶説によって明らかにされた罪の理解すなわち、罪を一本の木にたとえ、幹が切られることを罪の赦しに、木の根が抜かれることを「きよめ」と捉える理解から、罪は人間存在に深く浸透している習性であり、樹木を処理するように抜き取ることのできないものあるとの罪の理解への移行がある¹。

魂から原罪という根が取り去られるという根絶説を土台とする説教では、生活の中でホーリネスに相応しい歩みを目指すことが強調され、生活の隅々にまで「きよめられた者がそのように生きて良いのか」と問いかける説教が語られていった。それが聖別会らしい説教である。心探られ、時に心が刺されるような御言葉体験を通して、肉的習慣が剥ぎ取られていくことによって、主に近づくことをホーリネス人は喜びとしたのである。しかし、霊的生命が薄れて、恩寵と離れたところで生活に切り込むメッセージの型は、強迫観念を伴う律法主義に陥りやすい危険性があった。

しかし、上記の引用のように、罪の理解に変化が起きた。『私たちの信じる聖化』では、慰めのホーリネスという表現でそれを描写する。最近のホーリネス説教集の題は『さわやかなホーリネスの風』という題がつけられたが、聖会説教がみごとにイメージチェンジに成功したと言える。ホーリネスの語り口は大きく変化した。例えるならば、前者は外科の手術のように鋭く切り込んでくるのに対して、後者は内科の療養のような違いがあるように感じる。

芦田道夫牧師は中田重治の説教を分析し、ホーリネス運動の信仰を研究した第一人者と言えるが²、近年、牧師研修会をはじめ講演会で、日本ホーリネス教団が根絶説の立場をとらなくなったことを評価しつつ、変更の過程で適切な神学的な手続きを踏んでいないことに問題提起の声を上げている。

ここでの課題は、根絶説という「きよめ」の徹底に向かう極めて熱心な信仰態度に導く、ホーリネス教会のエトスに、どのような背景があるのかを問い直すことである。単に解釈が変わったので修正したということでは収まるのだろうか。また、聖化の説教の語り口に変化が起きつつあることに関して、評価と批評、あるいは大切なものを失いかけていないか吟味を必要としている。それらの必要とされている議論の題材として、ウェスレーにおける東方の救済論の影響を見ることとする。

2. ウェスレーにおける西方と東方の神学の影響

(a) ウェスレーと西方神学

ジョン・ウェスレーが継承した西方教会の伝統については多くを語るができるだろうが、ごく一部分に留めておきたい。ウェスレーは、確かに西方教会の伝統の中に生き、イギリス国教会に属する者

¹ 「聖化」ワーキング・グループ編『私たちの信じる聖化』《試論》、日本ホーリネス教団教育局、2005年、6頁。

² 芦田道夫「中田重治におけるホーリネス神学形成の研究」アジア神学大学院日本校（牧会学博士論文）、2003年。

としてプロテスタント宗教改革の主要な信仰を受け入れていた³。また、信条としては、聖公会大綱（39箇条）⁴と、米国で展開したメソジスト運動の為に一部修正したメソジスト宗教箇条（25箇条）⁵を用いて、明確に西方教会の伝統を継承している。

ウェスレーの回心体験として知られるアルダース・ゲイトの経験は、ウェスレー自身は日記の中でルター的な信仰義認の体験と重ねて描写し、宗教改革の流れの内に自己の福音理解を意図的に位置付けている⁶。

（b）ウェスレーと東方神学の研究

これらのことから、ウェスレーが西方教会の伝統を受け継いでいるということは明確であるが、1980年代から1990年代にかけてのウェスレー研究者たちは、東方教会の霊性がウェスレー神学に色濃く影響を与えていることを論じている。アルバート・C・アウトラー⁷やランディ・L・マドックス⁸の研究が、代表的なウェスレーの東方神学の影響を扱っている研究書である。また、日本においては清水光雄の『ウェスレーの救済論—西方と東方キリスト教思想の統合』⁹は緻密な議論を展開する良書である。

（c）ウェスレーを取り巻く教父研究の環境

清水光雄は、18世紀の英国において、ウェスレーを取り巻く環境が、教父研究の豊かな状態であったことを語っている。「特にルネッサンス・ヒューマニズムの流れの中で一六～一七世紀の英国の神学者たちは教父研究を始め、オックスフォード大学はこの研究センターとして教父文献の収集に携わり、多くの文献の英訳を出版し、一七世紀後半より一八世紀初期に至る教父研究興隆の土台を築いていった。ウェスレーに補祭の按手札を授けたポーター（John Potter）は、アレクサンドリアのクレメンスや殉教者ユスティノスの著作を編集し、出版した教父学者でもあった」¹⁰。

また、属していたイギリス国教会は、その特有な宗教改革を成した背景から、西方の伝統を重んじつつ、「忘れ去られた要（A Forgotten Strand）」として、東方的な神の生命への参与という救済観が流れていた¹¹。

このような、教父研究がごく身近な環境で、研究者であったウェスレーは自身も教父の文献を読み、また人々にも勧めて、メソジスト運動の参考書目録に教父の文献を入れている。手紙に真のキリスト教を代表する教父のリストを書いている。ローマのクレメンス、イグナティウス、ポリュカルポス、殉教者ユスティノス、エイレナイオス、オリゲネス、アレキサンドリアのクレメンス、キプリアヌス、シリアのマカリオス、シリアのエフライムの名が挙げられている¹²。

研究者たちによると教父の中で、ウェスレー神学への直接的な影響を考えられるのは、エイレナイオ

³ トマス・克蘭マーの『祈祷書』と『説教集』とをウェスレーは尊重し、イングランド国教会の義認理解の特色を生涯の間、継承した。岩本助成『『オールダースゲイト』再考』、『ウェスレー・メソジスト研究』5、教文館、2004年、28頁。

⁴ 『信条集—後篇』新教出版社、1957年、117-129頁。

⁵ 『信条集—後篇』新教出版社、1957年、291-298頁。

⁶ 藤本満『『アルダースゲイト』解釈をめぐって—岩本論文をきっかけとして』、『ウェスレー・メソジスト研究』6、教文館、2005年、49、5頁。

⁷ Albert C. Outler, *The Wesleyan Theological Heritage*, (Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 1991).

⁸ Randy L. Madox, *Responsible Grace: John Wesley's Practical Theology*, (Nashville, TN: Kingswood Books, 1994).

⁹ 清水光雄『ウェスレーの救済論—西方と東方キリスト教思想の統合』教文館、2002年。

¹⁰ 清水光雄『ウェスレーの救済論』20頁。

¹¹ 清水光雄『ウェスレーの救済論』20頁。

¹² Works, 10: 79, 清水光雄『ウェスレーの救済論』221頁。

ス、ニュッサのグレゴリウス（アタナシオスの弟子）¹³、クリュソストモス¹⁴、シリアのマカリオス¹⁵などである。

（d）西方と東方の神学の特徴

教会教父の研究者たちは厳密な意味で、西方と東方との区別はそれほど明確ではないことを知っている。ここで言う、初代教会の西方と東方の特徴というのは、あくまでも後の時代でカテゴライズした、単純化された区分けであることを但し書きとして記しておく。西方と東方の伝統の特徴が際立ってくるのは、ビザンティン時代以降のことである¹⁶。

スティーヴ・マッコミックは西方と東方の違いに触れている¹⁷。それらの視点を用いつつ、補足を行い、以下のように表にまとめてみた。

	西方の神学（ラテン教父）	東方の神学（ギリシャ教父）
救のタイプ	法的 (forensic)	治癒的 (therapeutic)
受肉の目的	赦しのために十字架の犠牲の肉体	神に参与するために再獲得される人間性
人間観	全的堕落、代償により赦された罪人	堕落した性質の癒し、神の像の回復
救いの内容	義認、罪責の赦し	聖化、神性への参与
救いの方向	私のため	私に真の自己に気づかせるため

3. ウェスレーが受け入れた東方神学の特徴

東方神学の霊性には、ヨハネ文書に見る神との霊的な結びとしての信仰が色濃くあらわれ、神学は神秘主義的に表現されている。ウェスレーは、西方の伝統にあるア・ケンピスやウィリアム・ローなどの霊性の書物にも浸透し、理想として聖化と完全を追い求めることを学んでいた。そこに、救済論と人間論の領域において東方の神学が大きな影響を与えたのである。

小林和夫は、「ウェスレー神学と情熱」という論考でこのように語る。「ウェスレーは英国国教会に apostolic experience という、弟子たちが受けた聖霊の経験がもう一度注ぎこまれることによって、英国国教会自身が活性化されて生きていく教会になることのためにというのが、ウェスレーの目指したところでありました。…その古いなかで立派に使徒的伝承をもっている英国国教会を生かしていくために、使徒的経験、これをいまの学問の言葉でいいますと東方の生命的 participation (いのちの共有の) 教理をもって、聖霊によるいのちを吹き込むことによって、教会を新しくしようとしたのであるというのが、ウェスレー神学の全貌である」¹⁸。

¹³ John G. Merritt, "Dialogue' within a Tradition: John Wesley and Gregory of Nyssa Discuss Christian Perfection," *Wesleyan Theological Journal* vol.22, (Wilmore, KY: 1987), pp92-116.

¹⁴ K. Steve McCormick, "Theosis in Chrysostom and Wesley: An Eastern Paradigm on Faith and Love," *Wesleyan Theological Journal* vol.26, (Wilmore, KY: 1987), pp38-103.

¹⁵ 清水光雄『ウェスレーの救済論』63-70, 220頁.

¹⁶ 受肉理解や神化の思想は、ギリシャ教父たちによって定式化され、東方神学全体に受け入れられていった。東方正教会の代表的な神学者として、聖マクシモスの名を挙げることができる。J・ペリカン『キリスト教の伝統—教理発展の歴史—第2巻東方キリスト教世界の精神（600-1700年）』鈴木浩訳、教文館、2006年、51頁。

¹⁷ McCormick, "Theosis in Chrysostom and Wesley," pp38-39.

¹⁸ 小林和夫『論集「聖化論の研究」—ウェスレアン・アルミニアニズムの立場より』日本ホーリネス教団、2004年、351頁。

(a) 受肉の意味：神化 (theosis)

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。

(ヨハネ福音書 1 章 1、14 節)

イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。(ヨハネ福音書 10 章 34～35 節)

東方教会の最も際立った神学は、「神化」(theosis) と呼ばれる神学である。英語では“deification”と訳され、文字通り「神に化す」という意味であるが、「神格化」と誤解が生じる危険性もあるので注意深く理解する必要がある。清水光雄は、「ウェスレーは神化…言葉が誤解されないために、また、哲学的表現であるために、それを聖化という表現に言い換えて『マカリオスの説教』を抜粋している…ウェスレーは神化という言葉こそ使わないが、その内容を聖化という表現の中に盛り込ませた」¹⁹。ウェスレーは「神化」を「栄化に向かう聖化」として捉えたのだった。

「神化」の神学を語った教父のアタナシオスは『ロゴスの受肉』という書物を残している。真の神であるロゴス・キリストが、肉体をとって全く人となられた。神性を保持されるお方が受肉し人性を持たれた時、神の側から人間の側へ渡って下さっただけでなく、人間の側から神の側に交わることができるかけ橋となって下さったのである。アタナシオスは「彼が人になられたのは、私たちが神となるためである」²⁰という有名な言葉を残した。清水光雄は「神化の存在論的基盤は受肉論にあった。神が人間になって下さったお蔭で、人間の神に至る道が開かれたのだ」と説明する²¹。

この受肉したロゴスを媒介とする、神性—人性の交流は、クリュソストモスに継承され、修道院のホーリネスを追求する生活の理想と不可分な思想として定着していった²²。

東方教会において、受肉だけでなく、主の復活体も大きな意味を持つ。復活の主を信じるということは、主の復活と結ばれることであり、神化の像に参与することである。主イエスの復活体は、信仰者の「将来の肉体的な復活と不滅性の象徴」²³であり、神化（聖化、栄化）の像だと言える。

(b) 神の像 (Imago Dei) の回復

わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです (II コリント 3 章 18 節)

愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。

しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。(I ヨハネの手紙 3 章 2 節)

西方と東方の神学の強調点の違いは、人間観にあらわれる。西方の人間観では、人間は全く墮落した状態 (total depravity) にあり、ただ主イエスの贖いによって救われることが語られる。ウェスレーはアウグスチヌス以降のこの原罪理解を受け入れていた²⁴。

¹⁹ 清水光雄『ウェスレーの救済論』38頁。

²⁰ McCormick, “Theosis in Chrysostom and Wesley,” p47; Athanasius, *De Incarnatione Verbi Dei*, 54.

²¹ 清水光雄『ウェスレーの救済論』44頁。

²² McCormick, “Theosis in Chrysostom and Wesley,” p83.

²³ ペリカン『キリスト教の伝統一第2巻東方キリスト教世界の精神 (600-1700年)』53頁。

²⁴ 『私たちの信じる聖化』29頁。

東方の神学では、原罪とは本来の人間性である神の像 (Imago Dei) が壊れた状態であると理解する。救いとは、キリストの恵みによって神の像が癒されていくことである。それゆえに、東方の救済観は、西方の法的 (forensic) 救済観と異なり、治癒的 (therapeutic) 救済観である。東方の神学では、キリストの受肉は人間が神に似るものへと魂が治癒される目的であり、それを聖化、完全、神化というように治癒的救いとして解釈している²⁵。

ウェスレーは『キリスト者の完全』²⁶で神の像の回復に関してこう語る。「神が与えてくださるこの偉大な贈り物、すなわち私たちのたましいの救いは、私たちの心に神の像が新たに刻印されることに他ならない。…信仰者のたましいと心が、創造者の似姿に従って再生されることである」²⁷。

カパドキヤの三教父の一人ニュッサのグレゴリウスは、「キリスト者の完全」ということを語った。「ニュッサのグレゴリウスに関して言えば、ウェスレーとグレゴリオスの両者は罪の克服を絶えざる成長を通して追い求め、墮落によって失われた神の像の回復を人類のゴールとすることで、両者は同様の完全理解を保持していた」²⁸。

藤本満は「聖化の神学」という章の中で、「神の像の回復」という聖化観こそがウェスレーの聖化観の中心であったと語る。「この神の恵みを刻まれた人間が恵みによって如何にその像を回復し、その神的運命に完成させるか、それがウェスレー神学の中心的課題であった。換言すれば、ウェスレー神学は、先行的恩寵から始まる神の恵みが、いかに人間の内側に神的変貌を喚起し、その具体的な現れとしてのクリスチャン生活を造形し、キリストの御かたちに成長していくか、という目的論的傾向を持っている」²⁹。

(c) 参与 (participation theory)

わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。(Iヨハネの手紙1章3節)

わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。(ヨハネ福音書17章23節)

参与説 (participation theory) は、キリスト教の救済観の一つである。救済の理解は多くあり、刑罰代償 (アンセルムス)、勝利者キリスト (アウレン)、身代り、代表、和解と多面的に救いを捉えることができる。それらの中で参与説とは、神との神秘的結合を通して、救いのリアリティに参与するという救済観である。東方の神学では、受肉の理解で既に見たように、神性を備えておられるロゴスなるお方が受肉し人性を持ち、その受肉したロゴスと信仰者が結ばれることにより、神的生命に触れる者となるというのです。受肉者の存在が、「神性—人性の参与」(divine-human participation) の場として用いられ、主イエスの御存在を通して、人間の神の像が回復される。創造の時、元々、人間が神の像に造られた目的は、神的生命と交わり、神的生命に預かり生きることであった。墮落によって神の像が損なわれたのだが、キリストによって回復するのである。

²⁵ 清水光雄『ウェスレーの救済論』38頁。

²⁶ ジョン・ウェスレーの「キリスト者の完全」の意味は、「完成した完全」(perfected perfection)ではなく、「完成されていく完全」(Perfecting perfection)のことである。A・ルシーは「未だ完全には完全でない」という表題で、フィリピ3章12節を巡るウェスレーの言葉を紹介している。J・ウェスレー、A・ルシー編『心を新たに—ウェスレーによる一日一章』教文館、349頁。

²⁷ ジョン・ウェスレー『キリスト者の完全』藤本満訳、イムマヌエル総合伝道団出版事業部、2006年、68頁。

²⁸ Robert S. Brightmans, "Gregory of Nyssa and John Wesley in Theological Dialogue on the Christian Life," (Boston University, Ph. D. thesis, 1969), pp273f, 315f. 清水光雄『ウェスレーの救済論』36頁。

²⁹ 藤本満『ウェスレーの神学』福音文書刊行会、1990年、109-110頁。

一七七四年に、ウェスレーが出したスクーガルの抜粋集に、神的生命に参与する人間の魂が描かれている。「真の宗教とは魂と神との結合、神的本性に真に参与することである。使徒の表現で言えば私たちの内に形成されたキリストである。…一言で表すならば、真の宗教とは神的生命のことである」³⁰。

4. 根絶説の視点と、神の像の回復の視点との相違点と類似点

「神化」という聖化観と「根絶説」という聖化観とを並列に置いて比較することに、問いを持つ者もあるかもしれない。そこで、それらの相違点を明示した上で、類似点を探ろうと思う。その作業により根絶説を土台として説教を語ってきた私たちが、神化の靈性を捉え直すことを通して、ホーリネス説教の進むべき道や帰るべき所、あるいは保持すべき生命が見えてくるのではないだろうか。

まず、相違点であるが、これら二つの聖化観の時代背景があまりにも大きく異なっていることである。「神化」という聖化観は、キリスト教の初期の東方のギリシャ教父が主張し、ビザンティン時代の東方正教会が継承した聖化理解である。根絶説は18世紀英国のウェスレーの時代に芽吹きがあり、その後、19世紀の米国のリバイバル運動で盛んになった聖化理解である。

根絶説に関しては、『ウェスレアン神学事典』で Charles W. Carter は以下のように解説している³¹。

根絶説 (Eradication)

根絶と言う用語は、あるウェスレー主義の神学者たちによれば、生来の罪を神の恵みによって徹底的に破壊することを意味してきた。この用語は、罪は破壊されるのではなく、抑制され、抑圧され、あるいは中和されるのであると教える教説に対抗して採用されてきた。抑圧説に立つ人々によると、罪は死に至るまで存続するが、内住の聖霊の力によって、事実上無効にされるのである。根絶説に立つ人々は、新約聖書に使われているギリシャ語の動詞や動詞形は、罪の圧迫ではなく除去を示していると主張する。この問題は、神のあがないの恵みによって、この世にある間に、内住の罪からどの程度の解放があるかということに焦点がある。

ウェスレー主義者たちの間で、この用語に対して二つの批判が絶え間なく浴びせられてきた。すなわち(1)根絶は聖書の言葉ではないこと、(2)あたかも虫歯を抜くように、罪とは魂から取り去ることのできる〔、〕ある「もの」すなわち物質であると考え間違った概念に、根絶ということば自体が導きやすいこと、という批判である。

(中略)〔ウェスレー〕の時代における係争点は、廃絶か、中断かであった。それは、根絶か、抑圧かという問題と用語上わずかな違いしかないのである。ウェスレーは「私は聖パウロが用意したという理由で『滅びる』ということばを使う。『中断する』ということばは私の聖書の中には見いだすことができない」と言った。…議論されている概念そのものは、語義の論議以上のものである。生来の罪の滅び、内的生命の徹底的な浄化は、依然として現代のホーリネス運動の主張を特徴づける教条なのである。

根絶説の特徴は、原罪を物質であるかのように捉えることである。このような理解を、存在論的な罪認識ということができるだろう。「神化」、あるいは「神の像の回復」という聖化観では、原罪を人間存在の本来の姿である神の像の喪失状態、もしくは破壊状態を指す。その視点は、根絶説のように人間と

³⁰ Wesley, ed. *The Life of God in the Soul of Man: or the Nature and Excellency of the Christian Religion* (London, 1756), p4. 清水光雄『ウェスレーの救済論』p53.

³¹ Charles W. Carter, 『ウェスレアン神学事典』福音文書刊行会、1993年、p217-218.

罪とを存在論的に見ているのだが、罪の塊と見るよりも、治癒していく人間の本性に焦点を当てているのである。外科手術のような切除する手法ではなく、内科療養のような育むプロセスである。いずれにしても、どちらも原罪と人間を存在論的に見つめている。その意味では観念的な解釈や、法的救済観よりも、存在論的認識の二者には近さがあると言える。

信仰を存在論的に捉えるという姿勢は、ホーリネス運動の初期から打ち出されていた。ある面では、観念的な深まりを持つような思想家がいなかったことも否めないが、中田重治は四重の福音を取り入れるときに、A. B. シンプソンのキリスト集中的な四重の福音理解（救い主キリスト、きよめ主キリスト、癒し主キリスト、再び来られる王キリスト）を、「〇〇化」という表現に置き換えて、「義化（義認）、聖化、健化（癒し）、栄化」と救済論的に捉え直した。これは、人間の身に福音が具現化するという存在論的な救済観が現れていると見ることができる。

説教学的な関心事として問われることは、JHC が根絶説の課題を乗り越えた時に、根絶説を主張した教会が共有していた信仰的エトスまで失ってはならないということである。ホーリネスの伝統は、根絶説を語るほど、具体的に（或いは存在論的に）聖なる神を愛し、罪を憎み、贖いの完成を待ち望んでいたということを、たとい根絶説を採用しなくなったとしても心に刻み続ける必要があるのではないか。そして、ウェスレーの聖化理解の背後にある、「神の像の回復」の聖化観を捉え直し、壊れた神の像が治癒され、神さまの霊的生命に養われ、救いの完成を待ち望み続け、真実に愛の奉仕に生きる歩みに招かれていることを覚えたいと思う。

5. 結：今日のきよめ信仰（JHC『私たちの信じる聖化』）と聖化の水脈の流れ

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」（ヨハネ福音書7章37～38節）

北米大陸の背骨のようにそびえるロッキー山脈に降る雨は、分水嶺で分かれ片方は太平洋へ、もう片方は4000km以上もの距離を流れて大西洋に注がれていく。私たち日本のホーリネス系の諸教派が、「きよめ」として受け継いでいる信仰が、教会の歴史の中で長い命の流れを辿り私たちにまでたどり着いていることを心に留めたい。使徒たちが記した聖書を、初代教会の教父たちがそれぞれの強調点をもって受け継ぎ、西方と東方の流れをウェスレーは受け入れ、米国の19世紀リバイバル運動の激流を通り、日本に流れついた。

上記のヨハネ福音書7章37～38節の御言は、『キリスト者の完全』の中で、ウェスレーが引用し、「人は神にあって幸せである。自分の内側から永遠のいのちの水があふれ（ヨハネ7章38節参）、その人のたましいは平安と喜びであふれているので、いつも幸せである」と語る。聖霊に魂がいのちの水をあふれさせて下さっているとウェスレーは語るのである。ホーリネス信仰の信仰継承について、葛田二雄著の『エプワースの流れ』³²や、小林和夫著の『信仰の源流を訪ねて』³³など、川の流れのイメージで語られてきた³⁴。日本のきよめ派は、教会史の中では支流であるかもしれないが、確かに命の流れの中にある。その流れの器として用いられてきたホーリネス説教を、今日、私たちがどのように語るか、また、ホーリネス説教の聴き手の魂の内より、聖霊によるいのちの水が湧き上がるかが問われているのである。

³² 葛田二雄『エプワースの流れ』日本ウェスレー出版教会、1958年。

³³ 小林和夫『信仰の源流を訪ねて』日本ホーリネス教団出版局、2000年。

³⁴ 山内一郎『メソジズムの源流—ウェスレー生誕三〇〇年を記念して』キリスト新聞社、2003年。